

鳥学ニュース

No.29


1988年11月25日

いろいろな顔をもった研究グループの機関誌

CETTIA

Aquila chrysaetos

No. 5 December 1987



日本イヌワシ研究会
Society for Research of Golden Eagle
Japan

No. 2



1984年 3月
山梨動物生態研究会

URBAN BIRDS

都市鳥研究会会誌



都市鳥研究会
1988年 3月

日本の白鳥 No13


日本白鳥の会会誌

鳥学雑誌におけるオセロの生態と行動

鳥学雑誌におけるオセロの生態と行動 (岩手県地方に生息するオセロ)

鳥学雑誌におけるオセロの生態と行動 (岩手県地方に生息するオセロ)

鳥学雑誌におけるオセロの生態と行動 (岩手県地方に生息するオセロ)



日本白鳥の会
昭和62年 9月発行

鳥学研究会ニュース

No. 2, 1988-6/15

鳥学研究会の概要
鳥学研究会の目的、活動、研究の概要等
鳥学研究会の目的、活動、研究の概要等
鳥学研究会の目的、活動、研究の概要等

鳥 類 研 究 グ ル ー プ (2)

アンケート項目

グループ名(団体)名 <設立年>

- ① 所在地(連絡先) 電話番号 ② 代表者(役職)
 ③ 事務局者(役職) ④ 目的・発足の趣旨 ⑤ ここ
 1~2年の活動内容 ⑥ 機関誌・連絡紙名(発行回数、
 年間総ページ数、版の大きさ、印刷の種類) ⑦ 構成
 (会員)数(その内の鳥学会々員数)おもな職業
 ⑧ 参加(入会)の資格・条件 ⑨ 年会費・参加費
 ⑩ その他の特記事項



キカ・チヨウメイケンキョウカイ

帰化鳥類研究会 <1982年>

- ① (〒156) 東京都世田谷区桜 3-2-16
 横山方 ☎ 03-420-8818
 ② 日野圭一(代表) ③ 横山隆一(事務局)
 ④ 東京で自然観察会を開く人が、東京の自然の特徴を知るためのひとつのテーマとして、カゴ抜けの鳥の動向に注目しようと発足した。東京で見られるワカケホンセイインコをはじめとする中型インコについて、その生態を把握するとともに、それをもとにして東京の自然と人の暮し方についての関係を明らかにするのが目的である。ワカケホンセイ以外のカゴ抜け鳥についても記録をとりため、比較材料としている。
 ⑤ 毎月2~3回、ワカケホンセイの集団ねぐらのカウント調査(東京都大田区)。東京西部および神奈川県北東部のワカケホンセイ個体群の追跡調査を継続的に実施している。
 春から初夏までは、繁殖地での行動記録を行ない今年では2年目になる。東京・埼玉・千葉・神奈川のエリアについては、今年中に現状報告を実施する予定。
 ⑥ パラキートニュース(年12回発行、12ページ、A4版)
 ⑦ 12名(1名)他に協力会員45名、学生、会社員、団体職員、主婦など。
 ⑧ フィールドワーク、月1回の例会に出席できる人。情報提供してもらえる人。
 ⑨ 年額1,000円

春から初夏までは、繁殖地での行動記録を行ない今年では2年目になる。東京・埼玉・千葉・神奈川のエリアについては、今年中に現状報告を実施する予定。

- ⑥ パラキートニュース(年12回発行、12ページ、A4版)
 ⑦ 12名(1名)他に協力会員45名、学生、会社員、団体職員、主婦など。
 ⑧ フィールドワーク、月1回の例会に出席できる人。情報提供してもらえる人。
 ⑨ 年額1,000円

相模川河口野鳥観察グループ

<1984年>

- ① (〒284) 神奈川県平塚市高村26-27-302 浜口哲一 気付
 ☎ 0463-33-7405
 ② ③ なし
 ④ 相模川河口の干潟で、定期的なセンサスを行なっている。同じ仕事を前グループ(相模川河口鳥類研究グループ)より引き継いで活動している。
 ⑤ 月2回のセンサスを交代で行なっている。1984年から87年までの4年間の記録をまとめた報告書を現在作成中。また相模川河口の自然を守る会と密接に連絡をとって、その活動のデータ・ベース的役割をしている。
 ⑥ なし。ただし報告書を数年おきに発行。
 ⑦ 8名(2名)
 ⑧ 相模川河口をフィールドとすることができ、また水鳥について基本的な識別ができること。

山梨動物生態研究会 <1977年>

- ① (〒400) 山梨県甲府市武田4-37
 山梨大学教育学部生物学教室
 ☎ 0552-52-1111 (内線3462)
 ② 中村司(会長) ③ 依田正直、湯本光子(事務局)
 ④ 山梨県を中心に、動物の生態研究および調査を行ない、研究発表会の開催や会誌の発行などを行なうため、有志が集まり発足した。
 ⑤ 山梨県内の種々の環境における鳥類の種類構成とその解析(杉原広を中心に)。東京都水道局水源林内の巣箱の利用状況の調

査(湯本光子を中心に)。甲府盆地におけるゴルフ場とアカマツの枯死状況の視察。

- ⑥ CETTIA (2年に1回, B5版)
 ⑦ 30名(5名) 教員
 ⑧ なし ⑨ 年額1,000円

北陸鳥学懇談会 <1985年>

- ① (〒920) 石川県金沢市丸の内1-1
 金沢大学理学部生態学研究室 池田善英気付
 ☎0762-62-4281(内線・554)
 ② 池田善英(世話人) ③ ②に同じ(2年毎に事務局は移転:発足時は林哲)
 ④ 北陸地方において鳥類を研究している人の多くは、学会大会・例会に参加・発表・討論する機会に、関東や近畿に在住者に比べて種々の意味で恵まれていない。そこで当地方に在住する鳥学会員が中心となって、近畿地区

懇談会を模範として発足した(発足時の仮称は日本鳥学会北陸地区懇談会であったが、鳥学会員以外の入会を促進するために、とりあえず上記名称を用いている)。目的は、互いに研究成果を発表し、親睦を深める場を提供すること。

- ⑤ 毎年3回の例会を原則として、石川・福井(富山では来年より開催予定)で開催している。1986年、87年の発表件数は各6件、88年は10月現在で5件。毎回10名前後の参加を得ている。
 ⑥ 北陸鳥学ニュース(年2~3回、約12ページ、B5版、ワープロ・コピー、88年より発行) ⑦ 29名(約10名) ⑧ だれでも可 ⑨ 年額500円 ⑩ 87年には近畿地区懇談会との合同例会を鴨池(石川)において行ない、34名の参加を得た。

論文の引用度 — フィンランド鳥学会誌の場合 —

研究者であれば誰しも、自分が書いた論文が他の論文にどれだけ引用されるかは、興味のあるところだろう。アメリカのようにそれが業績評価に結び付かないとしても、である。ヘルシンキ大学の2人の研究者がフィンランドの鳥学会誌『Ornis Fennica』に載った論文が、自国及び他国の研究者にどれだけ引用されているかを調べて見た(*)。

かれらは1963年から1982年までに『Ornis Fennica』に載った179本の論文が、1983年から1986年までにどのように国際誌に引用されたかを調べたのだ。調査論文はフィンランドの研究者によって英語またはドイツ語で発表された論文に限った。

するとまず全体の半分の論文は引用されていないことがわかった。しかし最近(1978-82)の論文に限るとその4分の3がなんらかの形で引用されていた。特に理論的研究や行動生態学関係の論文は、国内のプログラム(national programs)の総説や単なる種の分布に関する研究よりも10倍も多く引用されていた。特に行動生態学の論文は外国の研究者にも引用されることが多く、一方、これは当然のことであるが、ローカルな現象についての論文は自国の研究者によって多く引用されていた。また面白いことに、最近の論文(1978-82)における外国での引用率が低く、ある論文が引用されるまでに5~10年のタイム・ラグが存在することもわかった。

『日本鳥学会誌』も最近では英語の論文が多くなってきた。それらの論文はあちこちで引用されているだろうか。日本は極東の島国で、鳥の種類もヨーロッパやアメリカと異なっているため、同じ鳥を扱っている研究者が少ないというハンディはあるが、引用率は率直に言って『Ornis Fennica』に負けているような気がする。ことさらに外国での引用を意識することはないかもしれないが、やはり書くからにはその論文が鳥学の分野でもつ普遍的・一般的価値を考えるべきだと思うのである。(なお、自分の論文の引用はかぞえていない)

(上田恵介)

(*) Jarvinen, O. & Pietiainen, H. 1988. Citation patterns of papers published in Ornis Fennica. Ornis Fennica 65:31-36.

中国東北地方の鳥相近況

山口正信

1988年6月16日から7月6日にわたり、スウェーデンの探鳥グループが中国黒龍江省を訪問。西は海拉尔(ハイル)、北は大興安嶺へ嫩江をさかのぼり北緯50度を超え呼中(HONZHONG)へ。東は佳木斯(ジャムス)を経てウスリー江近く、洪河自然保護区(HONGHE NATURE RESERVE)へと縦横に踏査した。

同グループはベテランのバードウォッチャーを含む10余名で、この度、各地域毎の観察鳥リストが黒龍江省担当官より私のところに送られてきた。

この情報は、最近の中国東北部における繁殖シーズンの鳥相をうかがう上で大変興味があり、同好諸氏も関心を持たれることと思ひ、ここに報告、参考に供したいと思う。

なお、和名は世界鳥類和名辞典(山階芳麿著)及び、世界の鳥の和名、中国の鳥(山階鳥類研究所)によった。

洪河自然保護区 HONGHE NATURE RESERVE(ハバロフスク南西)

<6月16~18日>
アカエリカイツブリ、カワウ、サンカノゴイ、ダイサギ、アオサギ、ムラサキサギ、コウノトリ、マガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、マダラチュウヒ、ノスリ、カラフトワシ、チュウゲンボウ、アカアシチュウゲンボウ、チゴハヤブサ、ウズラ、キジ、タンチョウ、ヒメクイナ、オオバン、タゲリ、コチドリ、ツルシギ、アカアシシギ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、オグロシギ、ホウロクシギ、チュウジシギ、ユリカモメ、ハジロクロハラアジサシ、クロハラアジサシ、アジサシ、キジバト、カラバト、セグロカッコウ、カッコウ、コミミズク、ハリオアマツバメ、ヤマゲラ、アカゲラ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、コシアカツバメ、ツメナガセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ、マミジロタヒバリ、セジロタヒバリ、アカモズ、ノゴマ、ノビタキ、カラアカハラ、エゾセンニュウ、シベリヤセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ハシブトオオヨシキリ、ムジセッカ、カワリサンコウチュウ、ハシブトガラ、ホオジロ、コジュリン、オオジュリン、シマノジロ、シマアオジ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、コイカル、スズメ、シベリアムクドリ、ムクドリ、コウライウグイス、ミヤマガラス、ハシボソガラス。

帯岭 DAILING 近辺

<6月20~22日>
マガモ、オシドリ、コウライアイサ、カンムリハチクマ、トビ、ミサゴ、ツミ、ハイタカ、ノスリ、

チゴハヤブサ、エゾライチュウ、コウライクイナ、イソシギ、ヤマシギ、キジバト、ジュウイチ、セグロカッコウ、カッコウ、ツツドリ、フクロウ、ハリオアマツバメ、ブッポウソウ、カワセミ、ヤツガシラ、ミユビゲラ、アカゲラ、ツバメ、コシアカツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、サンショウクイ、アカモズ、ノゴマ、コルリ、シマゴマ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ノビタキ、ヒメイトヒヨドリ、マミジロ、トラツグミ、シロハラ、カラアカハラ、ヤブサメ、カラオオセッカ、オオヨシキリ、ムジセッカ、カラフトムジセッカ、カラフトムシクイ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、マミジロキビタキ、ムギマキ、オオルリ、サメビタキ、コサメビタキ、エナガ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、チュウセンメジロ、ホオジロ、シロハラホオジロ、ホオアカ、ミヤマホオジロ、シマアオジ、アオジ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、コイカル、イカル、スズメ、ムクドリ、カケス、オナガ、ホシガラス、ハシボソガラス。

札竜自然保護区 ZHALONG NATUR RESE-VE

<6月25~26日>
アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、サンカノゴイ、オオヨシゴイ、アオサギ、ムラサキサギ、ヘラサギ、サカヅラガン、カルガモ、マガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、シマアジ、ハシビロガモ、ホシハジロ、アカハジロ、トビ、チュウヒ、マダラチュウヒ、ノスリ、アカアシチュウゲンボウ、チゴハヤブサ、タンチョウ、マナヅル、オオバン、タゲリ、ツルシギ、コアオアシシギ、タカブシギ、ホウロクシギ、セイタカシギ、ツバメチドリ、ユリカモメ、セグロカモメ、ハジロクロハラアジサシ、キジバト、カラバト、カッコウ、アマツバメ、ハリオアマツバメ、ヤツガシラ、コヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、コシアカツバメ、ツメナガセキレイ、コヨシキリ、オオヨシキリ、オオセッカ、ツリスガラ、コジュリン、シマアオジ、ムクドリ、カササギ、ミヤマガラス、アジサシ、マミジロタヒバリ、アカモズ、ノビタキ、イナダヨシキリ、オオジュリン、スズメ。

加格达奇地区 JIAGEDAQI (嫩江上流)

<6月27日>
マガモ、トビ、マダラチュウヒ、ノスリ、ウズラ、キジ、コチドリ、タカブシギ、イソシギ、ハジロクロハラアジサシ、キジバト、セグロカッコウ、カッコウ、ハリオアマツバメ、カワセミ、ヤツガシラ、ツバメ、コシアカツバメ、キガシラセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ、マミジロタヒバリ、ビンズイ、アカモズ、ノゴマ、エゾセンニュウ、シベリヤセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、ムジセッカ、シマアオジ、アオジ、ベニマシコ、アカマシコ、スズメ、ムクドリ、オナガ、カササギ、ハシボソガラス。

呼中自然保護区 HUIZHONG NATURE RESERVE,

<6月28~30日>

カルガモ、ノスリ、エゾライチョウ、コチドリ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、キジバト、カウコウ、ツツドリ、アマツバメ、ミュビゲラ、アカゲラ、クマガラ、イワツバメ、ツバメ、キセキレイ、ビンズイ、アカモズ、ミソサザイ、ノゴマ、コルリ、シマゴマ、ルリビタキ、マミジロ、トラツグミ、カラオオセッカ、シベリアオオセッカ、エゾセンニユウ、マキノセンニユウ、ハシブトオオヨシキリ、ムジセッカ、カラフトムジセッカ、カラフトムシクイ、ヤナギムシクイ、メボソムシクイ、エゾムシクイ、サメビタキ、コサメビタキ、ムギマキ、オジロビタキ、エナガ、コガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、シマノジコ、アオジ、ベニマシコ、アカマシコ、マヒワ、スズメ、アカオカケス、オナガ、ホシガラス、ハシボソガラス

追加 ナキイスカ、チゴハヤブサ。

ハイラル地方南部、莫达木吉 MEDAMUJI 近辺

<7月2~3日>

ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、サンカノゴイ、アオサギ、ムラサキサギ、サカツラガン、ハイイロガン、コブハクチョウ、アカツクシガモ、カルガモ、マガモ、コガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、シマアジ、ハシビロガモ、アカハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、チュウヒ、オオノスリ、アカアシチュウゲンボウ、ワキスジハヤブサ、ウズラ、サメイロイヌワシ、タンチョウ、マナヅル、アネハヅル、ノガン、オオバ

ン、タゲリ、ムナグロ、コチドリ、シロチドリ、シベリヤオオバン、ツルシギ、コアオアシシギ、アオアシシギ、クサシギ、タカブシギ、オグロシギ、ソリハシシギ、ホウロクシギ、ダイシャクシギ、ソリハシセイタカシギ、セイタカシギ、ツバメチドリ、ユリカモメ、セグロカモメ、ハジロクロハラアジサシ、クロハラアジサシ、アジサシ、ハシブトアジサシ、オニアジサシ、キジバト、カワラバト、ヨーロッパアマツバメ、アマツバメ、ヤツガシラ、コウテンシ、コヒバリ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、コシアカツバメ、ツメナガセキレイ、キガシラセキレイ、ハクセキレイ、マミジロタヒバリ、コマミジロタヒバリ、ノビタキ、イナバビタキ、シベリヤセンニユウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、オオシユリン、シマアジ、スズメ、イエスズメ、ムクドリ。

北京近郊、長城地区

<7月6日>

コウライバト、オオジュウイチ、カウコウ、ヤマショウビン、ヤマゲラ、アカゲラ、ツバメ、コシアカツバメ、イワミセキレイ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、キバシマルハシ、ダルマエナガ、ヤブサメ、キスジカラフトムジセッカ、センダイムシクイ、マミジロキビタキ、カワリサンコウチュウ、シジュウカラ、メジロ、ハイガシラホオジロ、ホオジロ、カワラヒワ、コウライウグイス、オオチュウ、カケス、オナガ、カササギ、サンジャク、ハシブトガラス。

Information

●鳥類目録分布資料収集協力をお願い

鳥類目録改訂第6版の刊行予定では1987年末までに資料収集終了でしたが、現在まで資料をお送りいただいたのは、1道1府19県で半分以下です。未収地域は下記の通りですが、分布調査協力員以外の会員諸氏のご協力をお願いします。(藤巻裕蔵)

青森、宮城、茨城、群馬、埼玉、東京、長野、新潟、富山、石川、(福井)、岐阜、静岡、三重、京都、兵庫、奈良、島根、岡山、広島、(山口)、徳島、愛媛、高知、長崎、大分、沖縄。()内は一部の鳥類の資料。

【送り先】〒080 帯広市稲田町 帯広畜産大学 藤巻裕蔵宛

●鳥学用語集の編集について

鳥学用語集と鳥学辞典の編集は数年前に企画され、評議員会でもたびたび審議されてきましたが、評議員を中心に委員を最終的に練り直し、来年中に鳥学用語集の完成を目標に準備に入ることになりました。新編集委員は形態・分類・進化を森岡弘之・長谷川博、生理・遺伝・生化学を黒田長久・中村司、行動・生活史を中村登流・正富宏之、生態・分布を山岸哲・中村浩志、応用鳥学を阿部学・松岡茂の各氏が分担します。(森岡弘之)

●来年度大会は東京で開催します

鳥学用語集編纂委員会

原稿の投稿先

鳥学用語集編纂委員会

【学会誌】

〒079-01 北海道美瑛市光珠内 専修大学北海道短期大学 正富宏之 宛

【ニュース】

〒112 東京都文京区大塚5-40-10 日本大学豊山高校 川内博 宛

帯広畜産大学 野生動物管理学講座

帯広畜産大学は北海道東部、十勝平野のほぼ中央、帯広市の郊外にある。周囲は農耕地や自然林という緑豊かな環境にあり、大学構内、付属農場やその周辺でいろいろな動物の調査が十分できるのが自慢である。

畜産学の単科大学で、7学科からなり、畜産学をめぐるいろいろの分野がそろっている。このうち獣医学科は6年制、その他は4年制と修士課程とがあり、その一つに畜産環境学科がある。この学科は1974年に設置され、学内ではもっとも新しく、5講座からなる。野生動物管理学講座はその一つである。

研究室のスタッフは3名（教授・講師・助手）で、大学院生3名、学部生20名という新制大学に特有の大所帯である。農科系大学の1研究室として、エゾシカ、キジバト、ドバト、カラス類といった農業被害をおこす動物の研究も行なっているが、畜産学の領域内に限定されることなく、広く自然環境における動物（鳥類と哺乳類）を教育・研究している。とくに研究室所属の学生は3年の実習・夏季実習では、野外生活の食事メニューづくり、炊事をはじめ、鳥類・哺乳類の基本的な野外調査法を学ぶ。このような点で、この研究室は大学の中では異色の存在であり、さらに「野生動物管理学」の名のついた講座はわが国では唯一のものであろう。

次に研究内容を具体的に紹介しよう。対象は鳥類と哺乳類であるが、1ないしは数種の生態について研究したものと、ある地域・環境の鳥類、小哺乳類全体について研究した場合がある。個々の種をとりあげたものとして

は次のものがある。エゾライチョウ：野外・飼育下の生態、人工増殖。オオジシギ：日周行動とその季節変化、北海道における生息状況。キジバト、ドバト、カラス類：分布や繁殖生態。クマゲラ：繁殖生態、生態分布。アカゲラ：繁殖生態。カワガラス：繁殖生態、行動圏、個体数の季節変化、ノビタキ：繁殖生態、行動圏、成長、食性。シジュウカラ、ニューナイスズメ、コムクドリ：繁殖生態、食性。アオジ：繁殖生態、生態分布。コウモリ類：成長。ナキウサギ：分布、日周行動、食性。エゾリス：成長、日周行動、社会構造。ムクゲネズミ、エゾヤチネズミ：分布、成長、核型分析、食性。キツネ、ヒグマ：胃内容や糞の分析による食性。エゾシカ：分布、日周行動、テレメトリーによる行動圏、歯の年輪による齢査定と個体群構造の分析、胃内容や糞内の植物珪酸体による食性分析。

第二は鳥相または鳥類群集、小哺乳類相のテーマで研究されたもので、その一部は環境条件と関連させて分析されている。鳥類では、いろいろなタイプの森林の鳥類群集、帯広市における植被率と鳥類の生息状況との関連、帯広市の公園の鳥類、住宅地と農耕地の鳥相の比較、天然林と人工林の鳥類群集の比較などがある。哺乳類では日高山脈中・北部や大雪山系の小哺乳類の生態・垂直分布、公園や農耕地の小哺乳類の生息状況などがある。これらのうち一部の調査は、ある地域の総合調査や環境アセスメントに関連した動物相の調査の一環として行なわれている。この他、有害動物の駆除や防除に関連した研究である。鳥類ではカラス類やドバトの各種捕獲テストが行なわれ、哺乳類ではネズミ類とエゾシカについて研究されている。

なお詳しくは、研究室10年間の卒業論文(77編)、修士論文(11編)の要旨をまとめた資料「えぞらいちょう」(89頁)をご覧ください。希望者には1部1,000円でおわけしている。(藤巻裕蔵)

標識調査実習



「カッコウと宿主の相互進化」シンポジウム報告

1988年10月2, 3日、長野県軽井沢で「カッコウと宿主の相互進化」に関する、津戸基金第1回シンポジウムが開かれた。参加者は計18名。基調講演1と13の講演が行なわれた。

基調講演では、托卵する側とされる側が托卵をめぐる、それぞれ発達させ得るまたは発達させている行動や形態上の特性を托卵の諸側面ごとに検討し、問題点の所在を明らかにした。その後の講演はこの基調講演を受けた形で進められ、(I)「カッコウの托卵に対する



軽井沢にて (撮影：竹下信雄氏)

宿主の対抗適応」の講演が5つ行なわれた。第1日目の講演はここまでで終わり、夜は懇親会をかねた托卵のスライド上映会が行なわれた。翌日は、(II)「托卵する側とされる側の関係をめぐる地域ごとの特殊性」ということで、5つの講演が行なわれた。最後の総合討論では、2日間のまとめと日本における托卵研究の今後について話し合われた。

シンポジウムを通し、最近托卵関係が成立したオナガとカッコウの関係が注目された。この両者の関係は、わずか10数年で大きく変化し、オナガは卵識別能力や攻撃性などの対抗手段をきわめて短期間のうちに発達させつつあることなどが明らかにされた。また、総合討論では、調査方法の問題点、共同調査の必要性、広域的な調査の必要性なども話し合われた。終始、熱心な論議が行なわれ、充実したシンポジウムであった。会場を安く提供していただいた星野温泉に、心から感謝したい。

シンポジウム企画者 樋口広芳・中村浩志

ト卵に関する情報提供のお願い

「カッコウと宿主の相互進化」に関するシンポジウムにより、両者の関係は時間とともに、また地域によって変化するらしいことが明らかにされました。そのため、地域ごとの比較調査が今後ますます必要となってくるものと思われます。みなさんが住んでいる地域では、カッコウをはじめとした托卵鳥は、どんな鳥にどのくらい托卵しているでしょうか。また、托卵鳥の産む卵の色は宿主の卵にどの程度似ているでしょうか。

私たちは、この機会に、とくにカッコウとオナガの関係に注目しながら、関連の情報をいろいろな地域から集めたいと思っています。現在とくに知りたいと思っているのは、1) オナガへの托卵例が知られているかどうか、2) 知られているとすれば、それはいつ頃からか、3) カッコウによる托卵の頻度はどのくらいのものか、4) カッコウ卵はオナガ卵にどのくらい似ているか、5) オナガはカッコウの托卵にさいして攻撃性を示すかどうか、などです。これらのことについて情報をおもちの方は、下記のところまでご連絡いただければ幸いです。また、上記のことからなどについて、実際にこれから本格的に調査をしてくださる方が出てくることを願っています。

【連絡先】

〒150 東京都渋谷区東2-24-5 渋谷東ビル4階、日本野鳥の会研究センター

(☎03-486-4869) 樋口*広芳

または 〒380 長野市西長野 信大教育学部生態研究室 (☎0262-32-8106) 中村浩志

トキの増殖と保護——今後の課題

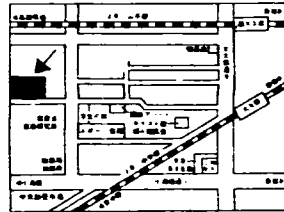
日時：1988年12月3日(土) 午後1時30分 - 5時

場所：国立科学博物館分館 資料館会議室 <参加費200円>

❖ 開演の時刻が早くなっています。ご注意ください。

【演者と講演内容】

1. 安田 健 (山階鳥類研究所)
トキの東アジアにおける過去の生息状況
2. 正田陽一 (東京大学名誉教授)
種が滅亡することの遺伝学的な意味
3. 近辻宏晃 (新潟県トキ保護センター)
佐渡のトキと保護センターの現在までの経過
4. 斎藤 勝 (多摩動物公園)
日本のトキ増殖活動経過と動物園での希少鳥類の保護増殖活動



❖ JR中央線大久保駅
・山手線 新大久保駅
下車 徒歩約8分

司会：森岡弘之 (国立科学博物館), 福田道雄 (上野動物園)

<ヨーロッパの古本屋紹介>

博物学関係ではヨーロッパ最大の古本屋のひとつである Dieter Schierenberg のカタログをご希望の方は、下記宛直接お申し込み下さい。Ornithology, Zoology など、希望の分野を明記のこと。

Dieter Schierenberg b.v. Prinsengracht 485-487
1016 HP Amsterdam, The Netherlands

<幹事退任>

幹事の石田健・米田実両氏は幹事を辞任されました。長い間ありがとうございました。

<学会費をお納めください>

本学会の年会費は前納制となっています。1989年度分をできるだけ郵便振替でお納めください。会費の納入状況は送られてきた封筒の「宛名ラベル」に記されていますのでご確認ください。普通会員 4,000円 維持会員 10,000円

<<会誌の発行について>>

刊行が遅くなりご迷惑をかけますが、36巻4号と37巻1号は年内にお手元へ届く予定です。37巻2号は英文の校閲中です。(編集幹事)

編集後記

一般講演42題、ポスター・VTR発表44題、シンポジウム、小集会、見学会ともりだくさんの我孫子での大会。参加者も200名を越えたとか。次号でそのようすもお伝えします。

(川内)

鳥学ニュース No. 29

1988年11月25日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1
 国立科学博物館分館内 (振替) 東京 1-6599
 (電話) 03(364)2311

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷